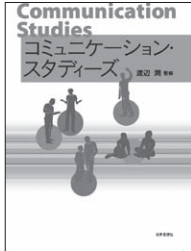


# コミュニケーション・スタディーズ

(世界思想社 2010 年)



山 中 雅 大

「問題1 コミュニケーションを英語で書いてください」、「問題2 コミュニケーションの意味を書いてください」、「問題3 コミュニケーションと似た意味のことばをあげてください」、「問題4 『コミュニケーション論』の講義に何を期待しますか」。渡辺潤先生の「コミュニケーション論」の講義は、学生にこれらの問いを投げ掛けるところから始まる。10年前の2008年、ぼくが東京経済大学で学部2年生だった頃の「コミュニケーション論」でも同様であった。

『コミュニケーション・スタディーズ』が刊行される以前から、企業が求める人材の上位に「コミュニケーション能力」は挙がり重視され、学生たちもまた「過剰」と言えるほどに他者との人間関係の親密さに過敏になっていた。メールや通話を目的とした「ケータイ電話」の利用は当然ながら、「足あと」機能に懊悩した mixi (2004年開設) も当時はまだ多くの人に利用されていたし、GREE (2004年開設) や mobage (2006年開設) も盛んで、YouTube (2007年開設) や Twitter (2008年開設)、そして Facebook (2008年開設) といった現在では一般化しているインターネット情報サービスが登場し出した頃であった。

対面であることをいとわない、絶え間ない「結合」を目的としたシームレスなコミュニケーションが、より一層加速的に行われているなかで、「コミュニケーション能力が高いこと」を善とする風潮は強く、前述の渡辺先生の4つ目の質問には多くの学生が「コミュニケーション能力を学びたい!」、「コミュニケーション能力を身につけたい!」と答えていた。20代以下の若者の約6割が利用(総務省2015年時点)しているLINE(2011年サービス開始)や、写真と「いいね!」の共有を求めるInstagram(2010年登場)が利用されている現代ではなおさらかもしれない。そんな無批判な学生たちの自明化された「コミュニケーション能力」に疑問を呈するところから、教科書での利用を目的として『コミュニケーション・スタディーズ』は刊行された。

ぼくが『コミュニケーション・スタディーズ』を手にとったのは、2011年に大学院に進学し、種々雑多な研究者が「アツク」議論し合い集う渡辺先生の研究室の門戸を叩いた年であった。東日本大震災の影響で、学部の卒業式、院の入学式はなく、授業の開始も大幅に遅れた年で、当時は「絆」が強調され、コミュニケー

ションの重要性が強く説かれていた。しかし、それとは違う「結合」で集まった「つわもの」たちが文字通り膝を突き合わせる程ひしめき合い渡辺先生のゼミに参集し、熱気やらコーヒーの湯気やらで部屋を白くくゆらせながら議論を戦わせていて（『分離』の戦い）とでも名付けよう！）、戦々恐々としたのが懐かしい。

大学院のゼミでは常時この書籍を携帯し、必要に応じて辞書のように開いては読み、また開いては読みといった「かじり読み」として悪しき利用をしていた。「本を読むことを勉強だと思わない大学生の意識を、どうしたら変えることができるのか（p.235）」という目的で作成されたこの書籍の期待に沿う変化は、怠惰で不真面目で悪しき院生であったぼくにはできなかったかもしれないが、「手本にしたのは予備校の教科書や受験参考書（p.235）」という利用は多分にできたのではないかとこの自負はある。今ではすっかり本がくたびれてしまった。

博士課程に進学し、様々な先生の下でTA（Teaching Assistant）に従事するなかでも、『コミュニケーション・スタディーズ』は大いに役に立った。時に、学生に「山中さん、いつもその本を持っていますね」と言われるほどに、ぼくのバイブルになっていたと言える。

『コミュニケーション・スタディーズ』の体裁は、大学の通年講義の教科書での利用を目的としているため、4つのPart（テーマ）に分かれている。「Part 1：コミュニケーションを考えるための基礎」、「Part 2：感情とコミュニケーション」、「Part 3：文化とコミュニケーション」、そして「Part 4：メディアとコミュニケーション」である。これらは、Part 2つごとに前後期の14回ずつ計28のトピックに分け、通

年で一冊終了できるように書かれている。内容は、各トピックで多彩な論者が登場する極めて理論的な書籍になっており、一年で全てを学生が理解するには厳しいかもしれない。しかし一方で、難解な理論や概念を分かりやすい例えて「難しさ」を緩和してくれる優しさに溢れている。それに加えて、時にスパイスのようにエッジの効いた批判や疑問点、展開が散りばめられている。何とも、「渡辺先生らしさ」が如実に表れた書籍なのではないかと、ぼくは思う。

極めて理論的で、批判を効かせ疑問点を提示しつつも、難解な表現はなるべく避け、学生のためにヒントを提示する。「コミュニケーション論」のガイダンスの冒頭における問いにしても、同じことが言えるのではないだろうか。「結合」ばかりに捉われてしまっている無批判で無自覚な学生に、コミュニケーションにおける「分離」を分かりやすくかつ理論的に説き、考え方のヒントを教示する。その「結合」と「分離」を礎に、「コミュニケーション」を学習してく論の展開は、「コミュニケーション論」や「コミュニケーション論入門」といった比較的1, 2年生の受講が多い講義には、学生にとって「大学で学ぶためのリテラシー」のヒントになったのではないだろうか。

少々「偏屈者」と思われるかもしれないが、学生に対して「やさしい厳しさ」を貫いている渡辺先生と、そんな先生の所に集う「つわもの」たちによってこの書籍は完成しているのだ。この書籍（メディア）は、そんな渡辺先生や先生を慕い集った研究室そのものを、「コミュニケーション」として「スタディー」してくれるものなのかもしれない（ただ「戦々恐々さ」だけは微塵も感じられないと思うが！）。